

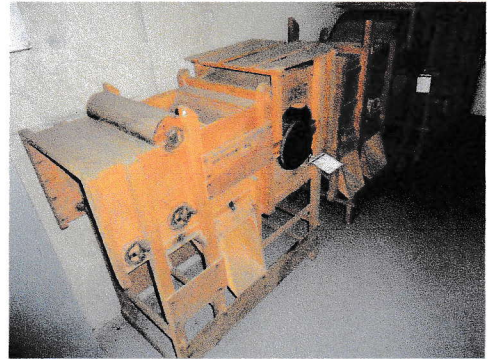
たかす開拓記念館活性化のために館内で収蔵されている民具の一部を紹介します。これらの民具は、長年にわたって会員の皆様や高鷲町民の皆様から御寄贈いたものです。その一部を紹介します。

## 唐箕 (トウミ、高鷲ではトミと呼ばれている)

唐箕 (とは、臼などで粃殻をはずしたあと、風力を起こして穀物を 粃殻・玄米・塵などに選別するための農具で、内蔵する四枚羽の板がハンドルと連動して回転するようになっており、唐箕の上部に配した漏斗 (じょうご) から少しずつ穀物を落下させ、そこに横から風を送ることで、藁屑や実のない粃などの軽いものを吹き飛ばし実の詰まった重い穀粒だけを手前に落とすのが基本的な原理である。

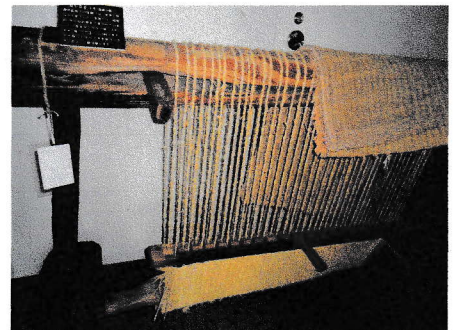
その歴史は、唐箕が発明される以前から、高所から脱穀物を落下させ、風力を利用して比重選別する方法は用いられていた。この作業を機械化した唐箕は紀元前 200 年から紀元後 200 年の間に中国で発明されたと考えられている。北宋時代の梅堯臣の漢詩から、唐箕の存在が推察されるものの、図があるわけではないため形状は不明である。具体的な形状が明らかになるのは、王禎の農書『農器図譜』(1313 年) の付図で密閉式の唐箕が描かれている。その後、宋応星の『天工開物』には開放型と閉鎖型の両方の唐箕が描かれている。日本には 17 世紀後半に伝来したとされ、文字で最初に現れるのは佐瀬与次右衛門の『会津農書』(1684 年刊) である。また、図が最初に現れるのは寺島良安の『和漢三才図会』(1712 年刊) とするのが通説である。一方で北陸地方の土屋又三郎の著した『耕稼春秋』(1707 年刊) には記載がないことなどから、この頃に唐箕は使われ始めたと思われる。

唐箕は東日本型と西日本型に大別される。東日本型は全体が正方形に近く、選別した穀物の吐出口が裏と表に分かれ、脚部が多脚、漏斗部が舟形で古くは分離できない構造であること、穀物の落下調節を側面で行うなどの特徴がある。一方、西日本型は横長で、選別した穀物の吐出口がいずれも正面で、脚部が 4 脚、漏斗部が分離できる構造であること、穀物の落下調節を正面から行うなどの特徴がある。このほか一般的な唐箕と異なる形態のものに、選別された穀物が真下に出るなどの特徴を持つ東北型半唐箕、真下に出た穀物を網で再選別する近畿型半唐箕、脚部が X 型で漏斗部を通った穀物が木箱の外側で選別されるようにした X 脚型唐箕 (奥三河型) などがある。



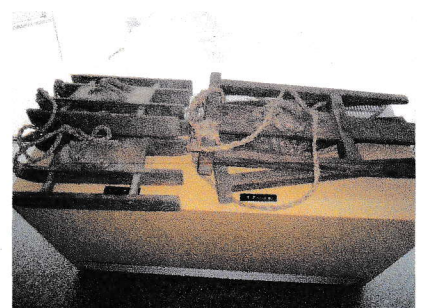
## 筵織り機 (ムシロオリキ)

筵 (むしろ) を織るのに明治から大正初期まで使用した。筵は、農家の部屋の敷物、穀物の天日乾燥の下敷、あるいは吠 (かます) 用など、極めて用途が広がった。



## 大足 (オオアシ)

水田に肥料として糞を入れて素足で踏み込んだ後、田植えが出来るようにするためこれを履き整地した。



## 糸巻き機 (イトマキキ)

紡錘から紡ぎ出した糸を、糸車に巻いていく。昔は何処の農家にもこうした養蚕・機織り用具があった。



## 脱穀機 (ダッコクキ)

刈り取って乾燥させた稲穂から籾を扱き落とすのに用いた。稲の脱穀は、江戸時代中期に千歯が発明されましたが、明治末にそれよりも高能率の脱穀用具として足踏脱穀機が登場した。山口県や広島県で考案・制作されて全国各地へ普及した。



## 犁 (スキ)

古代における犁の普及状況については、記録の上では、927年(延長5)に撰進された『延喜式(えんぎしき)』に宮中の膳部をつかさどる内膳司の農場が京北・奈良・山科にあり、牛を用いて馬鍬や把犁(カラスキ)をひかせていることが記されている。農場の備品として馬鍬2具、犁はヘラ2枚とサキ4枚が計上されている。また平安時代中期に成立した長編物語『宇津保物語』には、紀伊国(和歌山県と三重県の一部)の長者の家では田8町歩(約8ヘクタール)ほどを作り、「牛どもに犁かけつつ、男ども緒持ちて鋤く」と犁による耕作のようすが描写がされ、犁耕の普及を知ることができる。



## 抜根機 (バッコンキ)

樹木を伐採したあとに残った根株を、人力、畜力、動力などによって地中より引き抜いたり掘り起こしたりするのに使う機械。開墾による農地造成や桑園の土地改良の作業に用いられるが、開墾地への畜力用や動力用の機械導入は困難な場合が多かったため、昔は安全で能率よく抜根できるウィンチ式の人力用小型巻上牽引(けんいん)機が考案され、抜根機として利用された。この人力用抜根機は、手動ハンドルの操作によりチェーンブロックを作動させ、大きな牽引力を得るもので、最大3tくらいの牽引力を発生でき、樹径18cm程度までの抜根が可能である。抜根作業には本機のほかにワイヤロープ、滑車、大型バイス、ハンドル用補助パイプなどを用いる。これらを使っての抜根法には、丸太などで組んだ三脚を用いて、根株を上方に引き抜く立引法と、親株を基にして根株を側方に引き倒す横引法がある。滑車を利用して牽引すると力は倍増し、より抵抗の大きい根株を抜くことができる。しかし、現在では開墾の規模が大きくなり、またブルドーザーなどの大型機械が発達したため、能率の低い人力用抜根機に代わってレーキドーザーなどのドーザー類を利用した高能率抜根作業が行われている。

